

# たまがさ

## 喜 楽 園

## 菜 時 記

TAMA 市民塾 木村 京司

「喜樂園」は気らくに楽しいことをやる喜びを願って命名した菜園である。120 坪余りの畑で野菜・果実・花など年間 100 種類ほどを栽培している。

新緑の杜でウグイスがさえずり小川にはメダカ、ホトケドジョウ、サワガニ、アマガエルがにぎやかに鳴く自然に囲まれた環境での農作業も 10 年目になる。

### 家庭菜園の魅力

(1) 癒しを感じられる・・・土に触れ、日々変化する作物の成長をみて一喜一憂し、採れたて野菜の香りをたのしみ美味しく味わう。

(2) 収穫野菜の工夫・・・無農薬の新鮮野菜は、自由に採りごろを選び使う分だけ収穫できる。本葉 2～3 枚で間引いたニンジン油炒め、ダイコン、ハクサイはサラダ、みそ汁の具にすると美味しい。

秋に芽が出た玉ねぎを植え付けると翌春には分球し葉玉ねぎとなる。茎と球根を煮物や炒め物にするなど野菜を無駄にしないので食費の節約となる。

(3) おすそ分け・お付き合い・・・近所におすそ分けして収穫の喜びを共有し、珍しい料理法などを習うことができる。

(4) 挑戦・・・再生ゴボウ：収穫時に切り取った茎の部分を再び畑に植えると、数本のゴボウが出来る。

ウド：市販のものは地下室で栽培されるが、私は土に落ち葉と堆肥を混ぜ根株に積み上げ陽が当たらないよう黒いシートを被せ軟白ウドを作っている。採り立てのウドを酢味噌で食べるとつつい晩酌が進む。

今年も夏野菜の種まき、植え付けの季節となった。これからは暑さと闘いながら間引き、追肥土寄せ、水やり害虫駆除、鳥獣対応など繁忙期となる。

昔から五風十雨と言われているが、毎日の天気予報を気にしながら農作業の手順を考え、夫婦協働作業で豊作を願って身体が動かなくなるまで頑張りたい。



植え付け後保温、風除けにアンドンをかぶせるが、中は秘密！

活着したのでアンドンを取るとトマトナス・キュウリ・ピーマン・シシトウです

## 講座：きちんと知ろう、中東イスラームの歴史と現在

講師：岩木 秀樹

### 《 イスラームがテロを防ぐ 》

近い将来、イスラームが世界で最大の宗教集団になると言われている。それにもかかわらず、イスラームに対して偏見がはびこり、間違っただ情報が飛び交っている。またイスラームが原因で、テロや紛争が起こっていると思われる。確かにその側面はあり、イスラームが動員の道具に使われている場合もある。

しかしイスラームがテロや紛争を防いでいる側面があることも指摘する必要がある。テロや紛争の原因の一つが貧困・格差にあるとするならば、それらを低減化しようとする理念や装置が、イスラームには存在するからである。

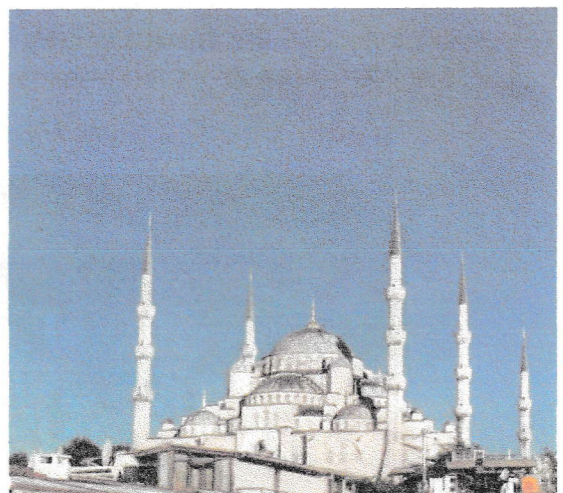
ムスリムが行うべき五行の三番目に喜捨があり、それは社会福祉、経済的再分配の機能を果たし、弱者救済を行っている。イスラームは孤児や貧困者、寡婦などの弱者に対する温かいまなざしを持っており、財産がある者はこのような弱者に対して、財産の3%程度を喜捨する義務がある。

イスラームが成立した頃のアラビア半島では貧富の格差が増大し、イスラームがそれに対するアンチテーゼとして台頭した。ムハンマドが孤児で苦勞をしたこともあり、弱者の救済を掲げて、それ以前の体制に挑戦した。

虐げられた人々を助けるのは最上の信仰と考えられている。このような観点から、2015年の人道支援額は、国民所得の割合で換算すると、一位よりトルコ、クウェート、アラブ首長国連邦、スイスと続き、イスラーム諸国が上位3位に入っている。紛争中にもかかわらず、いやむしろ紛争中だからこそ、困難な人々を助けるのは当然とのイスラームのメンタリティが生きている。

喜捨や断食や巡礼などは、他者への信頼、規範、ネットワークの総体である社会関係資本としても機能している。現在の弱肉強食の新自由主義により格差が増大する社会に対して、イスラームが一つの代替を提示している。

イスラームはテロや紛争に利用される側面もあるが、それらの原因を低減化し、平和共存に寄与していることも忘れてはならない。イスラームは弱者にやさしく、ホスピタリティにあふれる宗教でもある。イスラームの寛容性に基づく弱者救済の再分配福祉機能を再評価すべきであろう。



ブルーモスク遠景（岩木講師撮影）

## 【寄稿】

### 格闘の末に …… 何が残った水彩画

受講生:渡辺正道

(编者) 昨年「透明水彩画」高谷講師の講座を受講された渡辺さんから、受講後の感想が寄せられました。紙面の都合上、一部修正のうえ掲載させていただきます。

10ヶ月のロングランでスタートした「透明水彩画」の講座は今日で終わりである。これまで手に染めた基礎から前回までの作品と感想文を持参する事になっている。

昨夜から半年間の勉強の足跡を整理して準備する。作品は皆の前で講評を受けるのであるが、始めて手にした画材道具の名前さえ知らない生徒の作品をどう評価されるのであろうか。私は先生泣かせの生徒である。図画しか知らなかった生徒が飛び込んだ世界は異界であった。

評価は終わった。さすがに先生である。生徒の素性を見抜いてそれなりの評価をなされる。描き上げた作品は固有のものであってしかるべき、また、継続は力なり、今後も描くこと。作品の善し悪しより精神面が重要と受け止める。練習は蓄積され残るとも。

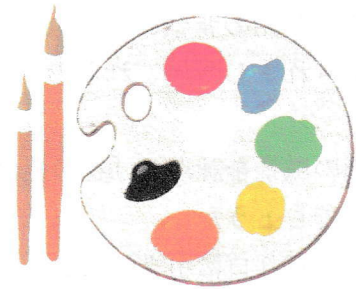
数十年前に得た技量は消失でなく何処かに温存されて、再度描き始めると出てくるものと。それともうひとつ「素直」という言葉。講評を聞きながら思った。来年から遊行期に突入する我が身に先生の言葉はずしりと重い。66歳まで44年間馬車馬の如く過ごした時期は高度成長と諸々のショックの時期と重なる。金銭的には潤沢でも心の中にはポツカリと空洞が生まれていた。

退職時、残された人生が5年か、10年か、15年かわからないが空いた穴を埋めたいとの思いで老後スタートした。何でもがむしゃらに取り入れるぞ、ここ8年未知の分野に取り組んだ。笑われようがどうであろうが時間がないと思い飛び込んだ。そこで見えてきた事は知らない世界が如何にあるかであった。

そして、もうひとつは「ご縁」である。今回指導いただく先生とのご縁はもちろんのこと、机を並べたSさんとのご縁も有難かった。先生の説明でわからないときは聞き役になってもらった。油絵の造詣が深く、有難かった。

受講目的が中途半端で出席したことを申し訳なく思うと同時に、ひとつの楽しみも生まれた。上手、下手は別物と肝に銘じて続けようと思う。いつ何時体調を崩すかもしれない我が身。

外出できない身体になってもマンションのベランダに出て。三原色の絵の具と小さなパレットに小さい絵筆で描く楽しみを教わったと思う。出来上がった作品は自己満足であっていい。がさつであった男が最後は少しだけ潤いのある人生に浸れたことだけでも今回の透明水彩画を描く塾にエントリーしてよかった。



## 日曜講座の報告

第117回日曜講座を開催しました。(会場：多摩交流センター)

実施日 平成31年4月21日(日) 午後2時～4時

演題 「武蔵野にまつわる文学」

講師 <sup>イノモト</sup>井 真弓氏 文学博士 清泉女子大学・東京女子大学非常勤講師

都の貴族たちにとって「武蔵野」とは、『伊勢物語』に描かれるように恋の逃避行の地でありました。他方、根が生薬や紫色の染料として利用された「紫草」は『古今和歌集』『古今和歌六帖』などに詠まれています。武蔵野の地を象徴すると同時に、「ゆかり(縁)」を導く植物として扱われています。

そしてこの二つの要素を物語展開の原動力として利用したのが『源氏物語』。紫上の呼称は、この「紫草」に由来し、彼女の生き様を呼称の変化から見直されました。

そもそも『源氏物語』の知識の無い私にとっては、武蔵野とのつながりは想像外の事で本当に驚きでした。

第2部は、小野小町伝説の成り立ちに関するお話でした。武蔵国分寺跡近くに「真姿の池」と呼ばれる場所があり、「玉造小町」伝説が伝えられています。

玉造小町は小野小町なのかの説明から始まり、小町にまつわる「老衰・零落譚」「病身譚」といった悲劇的な説話の紹介。そしてその説話の背景に隠された意図について、画像を交えながら説明されました。これらの話は我々の持っている「恋多き美しき」小町イメージには無いものでした。

季節の風景を詠んだ「花の色は うつりにけりな…」の歌も、実は「老衰・零落」のイメージとなったのでしょうか

軽快な語り口に引き込まれ、もっとお聞きしたい2時間でした。(駿河哲雄)



## 日曜講座の予定

10月は都合により行いません。

次回は令和2年1月19日(日)に行います。

「アジアの今を読み解く」講師：宮本謙介氏(北海道大学名誉教授)

## 講師募集の案内

募集期間は8月1日より9月17日までです。

詳細は別紙募集案内紙をご覧ください。

## スポット講座の報告

第2回スポット講座を開催しました。(会場：国分寺労政会館)

実施日：令和元年6月29日(土)午後1時半～3時半

演題：「多摩川の筏流しと筏道の旅」

講師：原田環爾氏(HP「多摩のジョギング道」「多摩の道探訪記」主宰)

いまにも降り出しそうな梅雨空にもかかわらず、87名の大勢の方々にご参加いただき国分寺で開催しました。(第1回は昨年11月多摩市で開催)

講座は、かつての筏流しの有様と筏道の簡単な紹介からはじまり、前半は「筏流しの概要」、江戸初期～昭和初期まで続いた花形稼業、奥多摩から六郷(大田区)まで60Kmの筏流し。

1本1本ばらばらに流れてきた(管流し)丸太を、古里で筏を組み(1枚15m、120本の材木)、青梅の千ヶ瀬で3枚繋ぎ全長50m、難所「羽村の堰」(堰明けは9月末から翌5月初めまで、月6回の午後1時から2時までの1時間の通行制限、筏通し場は4間7.2m。水門を損傷した場合の修理代として毎年冥加金納める。)

を通り拜島で一泊・調布二泊・二子玉川か宿河原三泊・六郷四泊の川下り。途中各所に設けられた仮橋(冬場の渇水期に架けられる)の障害、筏乗りのいでたち等、明治22年～30年頃の古い写真と現在の風景写真を対比して紹介、わかりやすく解説された。



後半は「筏道の概略」、六郷で筏を売り渡した筏乗りが奥多摩へ家路を急いだ道を「筏道」。この言葉が今も残る府中までの道筋をスライドに歴史・伝説・エピソード等を交え解説、バックに「青葉城恋唄」「旅人よ」のメロディーが流れノスタルジックなひととき。最後に府中から飛田給までの「いききの道」のスライドを「若者たち」のメロディーで紹介され、「筏流し」と「筏道」が腑に落ちた、あっという間の2時間でした。(文 八束)